

## 7・学生ボランティアと進める文化財レスキュー

加藤 幸治 東北学院大学 文学部 准教授

## 1. ボランティア募集のきっかけ

東北学院大学では、被災文化財等救援事業（以下、文化財レスキュー事業と記す）に一時保管施設として大学博物館が参加し、石巻市鮎川収蔵庫の民俗資料・考古資料・地学資料を一括受入れした。文化財レスキュー事業が動き出すにあたり、分割収蔵が好ましくない比較的規模の大きなコレクションの受入れを県の担当者に申し出た。それには二つの理由がある。ひとつは、大学は学生ボランティアを動員できる点である。そしてもうひとつは、公立博物館とは異なり、一時保管の空間がある程度確保できることであり、大学博物館の駐車場に未処理資料保管テントを設置、駐車場を一次洗浄場所とし、講義棟地下収蔵室および教室一つを収蔵場所として確保した。



レスキュー活動前の鮎川収蔵庫

恒常的に作業にあたった学生は、本学文学部歴史学科の民俗学ゼミナール（政岡伸洋ゼミナールと加藤幸治ゼミナール）、考古学ゼミナール（辻秀人ゼミナール）、および博物館学芸員資格課程の実習科目である「博物館実習」履修学生である。三、四年生と大学院生をあわせると60名を超え、人海戦術での作業には十分な人員であった。

現地での資料のレスキュー作業は6月下旬に行われた。津波の被害を受けて泥と海水にまみれた劣悪な状態から、比較的安定した状態に移行させるために行う一次洗浄作業は、7月から始められた。作業をはじめてすぐに実感したことは、被災文



被災地から大学博物館へ運搬

化財の手当の仕事は、次代の博物館を担う学生の技術鍛錬と資料整理法の経験蓄積には、非常に有益であるということであった。奇異な言い方ではあるが、被災文化財は教育資源であると感じたのである。東北地方はたびたび災害に見舞われてきた。この地域でなくとも、日本列島は様々な災害が毎年のようにおこる地域である。博物館だけがそれから逃れて安泰であるはずはないが、博物館学の教科書には火災や虫害等に対する備えの項目はあっても、災害に関する内容は皆無に等しい。現実には被災した文化財と対峙することは、学芸員養成だけでなく社会と地続きの学びを経験する機会にほかならない。このことに気付いた頃、ちょうど国立歴史民俗博物館で開催された特別集会「被災地の博物館に聞く」（7月30日）に登壇することになり、筆者はそこでボランティア参加を呼び掛けることにした。

他大学の学生との協働を企画した理由はもう一つある。それは被災地の大学が文化財レスキューに関与したとき、そこで活動する教員や院生、学生のすべてが被災者でもあるということである。被災の経験や深刻さは人によって様々であるが、なかには近親者を亡くした者、実家が流された者、地震の恐怖から平常心を保ち難い者もいる。災害に直面すると人は頑張ってしまうもので、学生は本当に驚くほどよく労働した。瓦礫と化した町や村を目の当たりにした学生にとって、瓦礫と見分けがつかないような破損した民具を洗浄することは、精神的に大きな負担であることは確かである。しかし、結果的に多くの学生がその作業に自分の居場所を見出していったことに、筆者は大き

な感動を覚えた。

しかし同時に、作業が進展するにつれ、学生が再び自らを見失いかけていくような状況が、夏休みに入るころには顕著になってきた。教員である筆者は、この活動に取り組みながらようやく勉強に向かう土台ができかけたころに夏休みに入ってしまい、目の前の取り組む課題を失ってしまうと、学生のモチベーションは再び減退し、後期の授業に出てこれなくなってしまうのではないかと恐れた。文化財レスキューはその意味でも、夏休み中も続ける必要があったし、外部の学生との交流も必要であると思われた。

本学が本格的に学生ボランティアを受け入れるようになったのは、上記の状況からであった。

## 2. ボランティア募集の方法

ボランティア運営で最も避けたいのは、現場がボランティア運営に翻弄されることである。これは5月頃の被災地の自治体の状況を振り返ってみれば想像に難くないであろう。ボランティアは、受け入れ側で許容できる範囲で運営されなければならない、そのためには全国津々浦々まで受け入れの情報が届くようなやり方は避けたかった。そこで、まず前述の国立歴史民俗博物館のシンポジウムで呼びかけて、その反応を見ることにした。結果的には、一回の作業に10名弱が集まるというペースであったので、ひとりひとりの名前も覚えられる程度の規模で進めることができた。

また、別の枠組みとして上智大学でのボランティア呼びかけをした。これは、本学歴史学科で企画した連続講演会「災害を乗り越えてきた人々」の講師として招待した、環境史・災害史の研究者である上智大学文学部の北條勝貴准教授が、学生活動を統括する部署の役員をされており、ボランティア派遣の調整役をしてくれることになったのである。しかも、ボランティア保険をかけ、学生の旅費を大学から補助するという積極的な支援を受けることができ、大きな戦力となっていった。

また、saveMLAKのウェブサイトを通じて、日本博物館協会経由で数名のボランティアも参加するなどして、結果的に受け入れ側の運営能力を超えることなく、作業を展開させることができた。

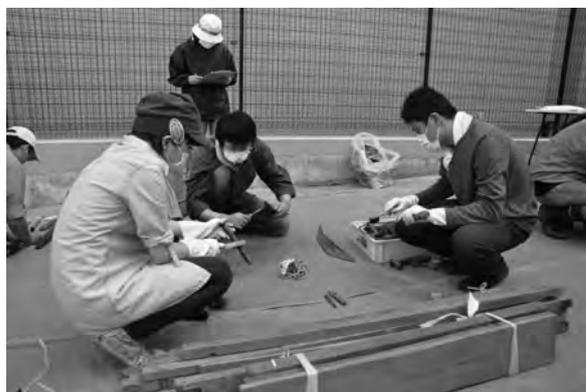
作業日は、夏休みが始まった8月16日から9月6日までの間の7日間で、のべ200名ほどが参加したが、このうち半数弱が学外からのボランティアであった。大学数は9つのばり、学部も経済学や建築学、語学、芸術系等、バリエーションに富んでいる。後期も授業期間中にもかかわらず、多くの学生が参加してくれ、春休みには再び一日に30人規模のボランティアを動員することができた。春休みの参加者は半数以上がリピーターであり、本学の学生・院生との個人的な信頼関係も

構築することができた点は、運営する側としてもうれしいことであった。

## 3. ボランティアを迎えての活動の運営

学生ボランティアとともに進める作業の中心は、民俗資料の一次洗浄作業である。この作業は、まず筆者と大学院生が、被災資料を観察した状態記録と被災状況にあった処置内容を「文化財レスキューカルテ」に書き込む。参加するボランティアはその指示を仰いだ後、処置前の資料の写真撮影を行い、実際のクリーニング作業に入る。一度に30人程度が作業をする現場では、情報を伝達・共有するためのカルテは非常に有効であった（このカルテは経過観察にも継続的に用いられる）。

作業は水洗いや豚毛ブラシを用いた泥落とし作業が中心で



関東の学生がクリーニング作業に合流

ある。作業内容に高度なものではなく、実際に仙台市内の高校生が参加した時も、十分に仕事をすることができた。数回参加したボランティアのなかには、カビが発生した資料に対するエタノールを用いた処理なども行った。民俗資料は、対象が多岐にわたるため、単純作業であってもボランティアたちは比較的新鮮な気持ちを保つことができるようである。クリーニング作業が終了すると、資料を収蔵室におさめる。泥を落とし、重いものを運搬するという肉体労働にも関わらず、精力的に作業を進めていくボランティアの姿は、本学の学生にも励みになったようである。

また、上智大学の教員・学生は、被災地での活動にも従事した。被災した石巻市鮎川収蔵庫の資料は7回に分けて東北学院大学博物館に運搬されたが、その最終回の10月12日の作業には、筆者と本学の学生、上智大学のボランティアがあたった。震災から半年間は、きわめて余震が多く、現地作業での二次災害の可能性もあったことから、学生を現地に派遣することはなかった。しかし時間が経過するにつれ、避難所



台風 12 号による二次被災

の支援や泥かき等の作業に学生ボランティアが多く活躍するようになっていたことから、このときは現地作業に加わってもらったのである。被災文化財は、現地の被災した牡鹿体育館に保管してあったが、それを美術品専用運搬車で搬出するのがこの日の作業内容であった。しかし、現地に保管していた被災文化財は、9月上旬に日本列島を縦断した台風一二号による二次被災をしていた。壁が破られていた体育館に浸水した雨水が、考古資料を入れて積み重ねていた平箱の三段目まで侵入し、その水が10月まで溜まったままになっており、内部で木箱等が腐敗していたのである。汚水を除去しながらの運搬作業は、当初の予定を大幅に超える時間を要したが、学生ボランティアらは黙々と作業にあたった。この日の作業には、カンボジアの考古学を専門とする上智大学の丸井雅子准教授も参加しており、丸井氏にはその後の洗浄作業のコーディネートもしていただくことになった。

#### 4. 効果と課題

平成24年3月下旬、民俗資料の一次洗浄はようやく終わり、考古資料の終了の目途も立ってきた。民俗資料はほぼすべてが破損しており、木端や土器片ようになったバラバラの資料を、これからどのように、そしてどこまで修復するのが課題である。3000点はゆうに超える量の民俗資料を年度内に洗浄し終えることができた理由は、学生のマンパワーを確保できたことに尽きる。大学で文化財レスキューを受け入れることのメリットは、技術は未熟だがヤル気と根気のある学生のパワーを集結し、地道な作業に投入できる点である。それは、大学生の学芸員養成においては訓練と実践の場であり、被災地の学生にとっては勉学を再開するためのステップとなる共同作業の場であり、被災地以外の学生にとっては社会貢献と自己実現の場である。文化財を復旧するという眼前の課題の克服の副産物とし

て、多くの学びが展開されることが、次の災害において何らかの形で生かされていくことを筆者は期待している。そのことが、学生が文化財レスキューにボランティアとして関わることの効果であるかもしれない。

一方課題もないではない。こうした活動が一過性のものにとどまるとき、参加する学生の自己満足に終わってしまうであろう。文化財レスキューは、現代の博物館のありかた、コレクションと地域社会との関係、文化的な資源を活用した実践活動とそれを継承していく保存活動の乖離といった、多くのことがらを再考する契機でもある。筆者は文化財レスキューに参加した学生が、その経験から様々なことを思考してほしいと考えている。筆者は学生との作業において、スローガンのように次の二つのことを言い続けてきた。ひとつは、「この資料を扱えればどんな資料とも対峙できる!」である。筆者はこれまでの学芸員としての仕事のなかで、これほど過酷な現場から収集された、これほど劣悪な資料を扱ったことがない。しかもそれらはバラバラで、台帳やリストも失われている。事実、この資料を復旧することは学芸員としてはかなりハードルが高い仕事である。これに加え、筆者は、次のようなことも学生に言い聞かせてきた。それは「泥おとしの作業から、災害以前に存在する社会の問題を探ろう!」である。文化財はどのような場所に所在しているのか、文化財の価値とは何か、コレクションは地域にとって何の役に立つか、復旧した資料は本当に研究に活用されるのか、被災文化財をコツコツと処理していると、様々な議論すべき課題が浮かび上がってくる。それらの多くは、平時の博物館のコレクションの問題と共通している。一過性の経験で終わるのではなく、そこから学生のフレッシュな発想で何かをつかみ取ってほしいものである。

今後は、コレクションの復旧作業を継続しつつ、その資料のバックデータを得るための民俗調査や、現地に返還するための機運作りとしての現地での展示や移動博物館活動を展開させていく予定である。被災文化財の復旧から新たな文化創造へと向かっていく活動においても、学生たちは力を発揮してくれるであろう。

本学で扱っている資料が収集された牡鹿半島は、未だ復興の道筋も見えていない困難な地域である。しかし、ある段階においては、被災文化財が持っている地域の文化や歴史を明らかにするための一次資料としての価値が必要となるに違いない。その時のために、今はカビを抑えたり、リストを完備したりする地道な作業にしっかり取り組んでいきたい。

平成 23 年 7 月 25 日

## 夏休み中の文化財レスキュー活動について（予定）

東北学院大学博物館  
加藤幸治

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震により被災した文化財を救援・修復する国の被災文化財等救援事業、いわゆる文化財レスキュー活動において、当館は一時保管施設として石巻市鮎川文化財収蔵庫を受入れ、民俗資料と考古資料を中心とした文化財の救援活動を進めています。現在は、第一次搬入資料の一次洗浄を終え、現在は第二次搬入資料のクリーニング作業に当たっています。

作業内容は、津波の圧力によって破損し、海水と泥で汚れた文化財をクリーニングし、カビの発生等に対処して、文化財を物理的に安定させるというものです。6月から現在まで、大学院生と大学三年生・四年生がこれに参加しています。作業の流れが軌道に乗り、より多くの学生がこれに関われる段階に至りましたので、このたび、本学二年生や他大学の学生・院生に夏休みの作業への参加を広く呼びかけるとこととしました。

作業日は、以下の通りです。参加を希望する学生・院生は、加藤までメールで連絡を入れたうえ、当日の作業時間に直接大学博物館に来てください。そのとき、ボランティア保険に入っていない学生は、その場で本学災害ボランティア・ステーションで加入手続きを取ってもらいます。

被災文化財の救援を通して社会貢献をしたい学生、文化財について関心のある学生、民俗学に興味のある学生は、ぜひこの機会に文化財レスキュー活動に参加してください。

### 記

#### 1、夏休み中の作業予定日

平成 23 年 8 月 16 日（火）・18 日（木）・23 日（火）・25 日（木）

9 月 3 日（土）・6 日（火）・8 日（木）

（すべて、9 時 30 分から 12 時・13 時 30 分から 16 時頃）

#### 2、参加方法

上記の作業予定日のなかから参加日を選択し、当日の参加時間（例えば午後 1 時～3 時半など）を加藤のメールまで送ること。参加を急遽取りやめる場合は、必ず加藤までその旨をメールで伝えること。

#### 3、集合場所等

当日は直接、東北学院大学博物館へ集合。

#### 4、作業内容

民俗資料の状態調査・クリーニング・写真撮影・収蔵庫への運搬作業等。

（被災地での活動は危険をとまなうため、行いません。）

#### 5、持ち物等

汚れても良い服装・長袖と長ズボンで必ず参加・マスク・ゴム手袋（スーパーで売っている食器洗い用の手袋、100 円程度）、帽子、飲み物等

ボランティア募集の呼びかけチラシ